

芦屋大学論叢 第82号  
(令和6年7月29日)抜刷

## 保育における「劇あそび」に関する一考察

—劇のための音楽づくりに着目して—

稲 葉 修 子  
石 田 愛 子  
葉 谷 佳 苗



## 保育における「劇あそび」に関する一考察

—劇のための音楽づくりに着目して—

稲葉修子

石田愛子

薬谷佳苗

芦屋大学臨床教育学部

### 1. はじめに

「劇あそび」は、多くの幼稚園で「生活発表会」の主要な演目のひとつとして実施されている。「劇あそび」は、日常の保育の「ごっこあそび」や「リズムあそび」など様々な「表現あそび」から発展するものであり、子どもたちが主体的に取り組む表現活動の集大成といえることができる。子どもたちは、「劇あそび」を通して言葉や身体表現力を高め、協調性を身に付け、想像力や創造性を豊かにすることができるのである。即興的な「ごっこあそび」とは異なり、物語を演じ、劇としての完成を目指す「劇あそび」においては、保育者の計画的かつ継続的な指導・支援が必要となる。特に発表会に向けた「劇あそび」のために保育者が担う役割は、題材の選定から台本作り、振付け、小道具や衣装の製作、音楽づくりなど多岐にわたる。劇中で効果的に音楽を用いることは、音楽に合わせて歌ったり踊ったりするだけでなく、子どもたちの想像力を刺激し、感情を動かし、より豊かな表現につながると考えられる。しかし、音楽の知識・技術や経験が豊富とはいえない保育者にとって、劇のための音楽づくりは難易度が高いことも、また事実である。

本稿では、「劇あそび」における音楽づくりの実践例を通して、劇中の音楽の役割とその効果、保育者に求められる力について考察する。

### 2. 「劇あそび」とは

#### 2.1 「ごっこあそび」と「劇あそび」・「劇づくり」

「ごっこあそび」とは、「子どもが日常生活の中で経験したことの蓄積から、つもりになって『～のような』模倣をし、身近なものを見たり、役割実現するというような象徴的な遊び」をいう<sup>1)</sup>。「ごっこあそび」は、もの見立て・ふり・つもりなど、心の中に再生されたイメージを他者と共有することが前提となるため、想像力や発想力に加え、思いを伝えあうコミュニケーション能力や、協調性が養われる。「ごっこあそび」のなかで子どもは登場人物になりきり、身近なものが小道具となって、即興的にストーリーが出来上がっていく。「劇あそび」は、「絵本やお話のストーリーを基盤として想像の世界で『ふり』や『つもり』を楽しむ遊び」である<sup>2)</sup>。「ごっこあそび」と「劇あそび」は何らかの役を演じる点で共通しているが、子ども同士の即興的なあそびで終わる「ごっこあそび」とは異なり、「劇あそび」には物語がある。また、劇としての完成を目指すことで、子どもたちの表現はより複雑で発展したものになり、保育者の継続的なかわり、指導が必要となる。

「劇あそび」について、遠藤ら（2009）は「主体的に活動を展開させる遊びを土台として長期にわたる活動となりうる。また、保護者前で発表するというその性質から、保育者同士、保育者と園児、園児たち、保

護者と保育者、保護者と園児などの多様な人間関係において協同的な行為の発達が期待される保育である。」と述べている。また、「ごっこ遊びがあそびそのもので、保育の中での保育者が介入しないでも展開していくのに対して、劇あそびは、保育者の指導が必要となる。」と述べている。さらに、「劇づくり」については、「劇を構成することを主眼として劇を構想にそって子どもの表現を導くこと」「上演するまでの期間に、子どもの状況を何度も考え直しを行うプロセスのこと」とし、「上演も含めて質的な向上を目指すもので、豊かな感性に裏付けられた保育者としての役割が重要だということが分かる」と述べている。また、柴田(2018)は、『劇づくり』はすでに『生活発表会』のような発表の場が意識された活動であり、その前段階として、日常保育での『ごっこ遊び』や『劇遊び』が存在している。」としている。さらに、劇あそびと劇づくりは「継続的」で「同一のフレーム(プロットがある)」ことを共通項としながら、劇あそびは「遊びの過程を楽しむことに重点を置き、第三者の視点を意識する」ものであり、劇づくりは「発表の場を想定し、観客の存在を意識する」ものとし、『劇遊び』と『劇づくり』の特性にそれほど相違点はなく、『劇づくり』の過程の中に『劇遊び』が内包されていると捉えることができる」と述べている。

## 2.2 「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」、保育5領域との関連

### 2.2.1 「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」との関連

「劇あそび」について、伊勢田(2001)は、「劇あそびは、保育・教育の方法・内容の一つであり、お話あるいは物語などを媒介として、遊びに劇的な内容を構成し、組織的に行いながら子どもの成長・発達をより促進することを目的に行われるのである。」と述べている。「劇あそび」を通して、子どもたちは①お話を知り、②そのお話に基づいて「ごっこあそび」をし、③クラス全体で動く経験をする。この過程における具体的な活動を「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」に照らすと、次のようにまとめることができる。

①では、保育者の読み聞かせを通して、絵本や物語に親しみ、先生や友だちと心を通わせる。語彙や表現力を身に付け、お話を聞いて感じたことや考えたことを言葉で伝えたり、相手の話を聞いたりし、「言葉による伝え合い」を楽しむようになる。

②では、お話に基づいてイメージを共有し、みんなで「ごっこあそび」をする。想像力を働かせ、感じたことや考えたことを友だち同士で表現して楽しむことで、「豊かな感性と表現」が養われる。また、友だちと関わる中で、互いの思いや考えを共有したり、考えたり工夫したり協力したりする「協同性」が育まれる。

③では、みんなで劇の完成を目指す中で、自分がしなければならないことを自覚し、考えたり工夫したりしながら諦めずにやり遂げることを経験する。また、友だちの気持ちに共感したり、自分と異なる考えがあることに気付いたり、自分の気持ちや友だちと折り合いをつけながら、きまりをつくったり守ったりするようになる。これらの経験を通して「自立心」が育まれ、「思考力の芽生え」や「道徳性・規範意識の芽生え」が期待される。

以上の活動の前提となるのは「健康な心と体」であり、題材となる絵本や物語を通して「自然との関わり・生命尊重」の意識や「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」などを身に付けることもできる。また、劇を保護者に見てもらえる機会は、家族や身近な人々との触れ合いを通して「社会生活との関わり」を意識するきっかけになると考えられる。

このように、「劇あそび」は、「幼稚園教育において育みたい3つの資質・能力」である「知識及び技能の基礎」「思考力、判断力、表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」を一体的に育むものである。「3つの資質・能力」は勝手に育つものではなく、適切な環境設定や、保育者の応答的な関わりによって育っていく。その資質・能力を育むための手法として「主体的・対話的で深い学び」という概念があるが、後述す

るN幼稚園における「劇あそび」では、保育者が用意した小道具の中に子どもたちが使いたいものがなく、子どもたち自身が自ら保育室内にあるものを使って製作を始めたり（＝主体的）、台本にある台詞は子どもたちと対話する中で生まれたり（＝対話的）、役柄を通じて自分ではない他者になることで、人の気持ちが想像できるようになったりした（＝深い学び）。これらは、「主体的・対話的で深い学び」を具現化した事例といえることができる。

## 2.2.2 保育5領域との関連

幼稚園教育要領（平成29年告示）ではその第2章「ねらい及び内容」に、幼稚園教育において育みたい資質・能力について幼児の発達の側面から、「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の5つの領域を示している。「劇あそび」は、領域「表現」の内容「(8)自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりする」に該当するものであり、「(4)感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現」したり、「(6)音楽に親しみ、歌を歌ったり」することも含まれる。これらの要素から「劇あそび」は特に領域「表現」に密接に関わるものであるが、「表現」のみならず、5領域全てとの関わりがあると考えられる。ここでは各領域と「劇あそび」の関連について述べていく。

### ・言葉

「劇あそび」には台詞があり、言葉のやりとりがある。絵本や物語を題材にするのであれば、事前に保育者が読み聞かせをすることにより、その場面を想像し、登場人物の気持ちを考えたり、その場にふさわしい台詞を考えたりすることによって、言葉に興味を持つ。そしてその中で、感じたこと、考えたことを言葉で伝え合うことが自然と身に付いてくるのである。また、台詞のやりとりをすることによって、相手の話を聞こうとする意欲や態度が育つ。「言葉」は「劇あそび」と最も深く関連する領域であるといえる。

### ・人間関係

「劇あそび」では複数の登場人物が現れ、様々なやりとりをする中で物語が進んでいくため、登場人物同士のやりとりを通して人間関係を学ぶことができる。また、「劇あそび」では、台詞や、時には劇中で歌う歌なども、保育者と子どもたち、あるいは子どもたち同士がコミュニケーションを取りながら互いにかかわりを深め、協同して遊ぶ中で作り上げていくものである。工夫したり、協力したり、支えあってひとつのものを作り上げていく、その過程で信頼感を育み、共に過ごすことの喜びを味わうことができる。

### ・健康

「劇あそび」は身体を使った遊びである。劇中で音楽に合わせて歌ったり、ダンスをしたりすることがあるのはもちろん、「人間関係」でも述べたように、保育者との、また子どもたち同士の触れ合いも大切な要素である。コミュニケーションをとりながら、劇中の様々な活動（歩く・飛び跳ねる・歌う・ダンスをする等）に親しみ、楽しんで取り組むことができる。動くときに子どもたち同士がお互いに適度な距離を取り、ぶつかって怪我をしないようにする、などの配慮をすることもできるようになる。

### ・環境

「劇あそび」には、動物や植物など、自然の中にある様々なものが登場する。ウサギやヤギといった動物はもちろん、木になったり風になったり、いろいろなものになろうとするとき、それらのものに興味を持ち、観察しようとする。そこには新たな気付きが生まれ、様々なものに命やくらしがあることを実感し、いたわったり、大切にしたりする気持ちが芽生える。また、お話を進めていく上で、必要な道具を作ったり、聞こえてくる音をどのように表すかを考えたりしていく中で、身近なものや遊具などに興味をもち、試したり工夫

したりして遊ぶことを覚えていく。

#### ・表現

上記のような様々な領域との関連を経て、生活の中でのイメージを育み、感じたことや考えたことを表現していく表現活動としての「劇あそび」となっていく。自分の中のイメージを実現するために、「環境」で述べたように、身近な物で考えたり、試したり工夫することに加え、「いろいろな素材に親しみ、工夫して遊」んだり「かいたり、つくったりすることを楽しみ、遊びに使ったり」（表現の内容(5)(7)）して、自ら新しい道具を作ったりすることも自己「表現」のひとつであろう。

### 3. 実践例－劇のための音楽づくり

劇のための音楽には、物語の世界や場面を表すもの、特定の登場人物を表すもの、台詞をのせて歌ったり踊ったりするもの、などがある。特定の登場人物や情景を表す、いわゆるテーマ曲は、劇中で繰り返し演奏されることが多く、登場人物のキャラクターを印象づけ、物語の進行をよりわかりやすくする。劇中の歌・BGM・効果音は、物語の世界を共有するうえで、大きな役割を果たすのである。ここでは、稲葉が音楽指導に携わったN幼稚園での「劇あそび」について紹介し、音楽づくりにおける具体的な表現の工夫とその効果について述べる。

#### 3.1 指導のプロセス

- ・クラスの概要：2年保育1年目の4歳児クラス14名（男子7名、女子7名）
- ・発表の対象：クラスの保護者
- ・実践期間：202X年度、12月初旬から2月上旬の劇発表本番までの約2か月

生活発表会に向けた「劇あそび」は上記のとおり約2か月の間であるが、その“種まき”は夏ごろから始まる。子どもたちが好きな絵本など、子どもたちが興味を持って、主体的に楽しく取り組める題材を探すところからテーマを絞り込んでいく。「劇あそび」の工程をまとめると、表1のようになる。

表1 N 幼稚園における「劇あそび」の工程

時期	保育者の動き	子どもの様子
8月	・題材の候補となる絵本を選ぶ	
9月	・子どもたちに絵本を読んで反応を確かめる	・絵本に興味を示す
10～ 11月	・「ごっこあそび」で楽しみながら導入していく ・劇に必要な道具等の準備をする  ・台本作成にとりかかる	・いろいろな登場人物になりきり、反復しながら理解を深めている ・身近なもので自分なりに小道具を作ろうとする
12月	・生活発表会に向けた指導計画を完成させる ・子どもたちの姿から、必要に応じて台本の見直しをする	
1月	・音楽を劇の中に入れ、音楽を効果的に使用する	・音を聞いて動いたり、踊ったり、歌う等、より豊かな表現になっていく ・役柄を理解し、台詞を言い、クラス全体の流れで動くようになる
2月	・発表会本番	・自分が楽しむだけでなく、「見てほしい」という気持ちが芽生える

今回、選んだ題材は、『アントン先生』（西村敏雄・作、講談社）である。

「アントン先生は、森で一人のお医者様。動物たちの怪我や病気など何でも診てくれています。『どうしましたか?』『注射をしましょう』『この薬を飲んでください』と動物たちの症状に合わせて、テキパキと治療をしています。優しいアントン先生に治療してもらおうと、動物たちは元気いっぱいになります。動物たちは何かあるとすぐに病院に行くので、待合室はいつも大行列！ アントン先生は往診に出掛けていくこともあります。そんなある日、アントン先生が働き過ぎで倒れてしまいます。アントン先生のことを心配して集まった動物たちは・・・」というあらすじである。

アントン先生は、困っている動物たちの話をじっくり聞き、治す方法を考えたり、原因を考えたりして、動物たちが元気に過ごせるようにと、人のために行動する思いやりをもっている。アントン先生が倒れた時には、たくさんの動物が集まり、アントン先生のためにシチュエーションを作る様子から、動物たちがアントン先生のことを慕っていることがうかがえる。アントン先生と動物たちのやりとりから、友だちのことを思いやり、友だちのために自分ができることを考えられるように、また、困ったときには友だちと助け合ってほしい、との願いから、劇のテーマを「友だち大好き♡ ころほかほか 嬉しいな」と設定した。

### 3.2 音楽づくり

#### 3.2.1 劇に使用した楽曲

『アントン先生』の「劇あそび」で使用した楽曲は表2のとおりである。

表2 『アントン先生』の「劇あそび」で使用した楽曲一覧

	使用場面	曲名	作曲者	音楽ジャンル
1	夜の森	きらきら星	フランスの歌	外国の曲
2	ヤギの登場	やぎさんゆうびん	團 伊久磨	子どもの歌
3	ヤギの動き	やぎさんゆうびん	〃 (担任による変奏)	〃
4	ライオンの登場	ライオンの大行進	サン・サーンス	クラシック
5	ニワトリの登場	あめがぼつぼつ	—	わらべうた
6	ニワトリの歌とダンス	チキンダンス	悠木 昭宏	子どもの歌
7	風邪菌のダンス	Try Everything	Mikkel Eriksen 他	ディズニーの曲
8	手洗い	うさぎとかめ	納所 弁次郎	子どもの歌
9	ヤギの野菜さがし	野菜みつけ歌	担任 M 先生・ 稲葉修子	オリジナル曲
10	寂しい気持ち	小さなピアノ	フランスの曲	外国の曲
11	シチューを作る	カレーライスのうた	峯 陽	手あそび歌
12	元気になって解決	ロックリバーへ	渡辺 岳夫	アニメ曲
13	歌 (エンディング)	ラララだいすき	高田 さとし	子どもの歌

劇中使用した曲 No 5～8、11～13 の選曲の理由・経緯は次のとおりである。

No 5 の《あめがぼつぼつ》は、ニワトリのえさをついばむ「コツコツ」と「ぼつぼつ」の擬音語が類似していることから選曲した。

No 6 の《チキンダンス》は、登場人物がニワトリなので、ニワトリをキーワードに選曲した。曲を聞いた子どもたちは曲のリズムに合わせて手を叩いたり、歌詞に合わせてお尻を振る動きをしたり、自然に楽しいダンスパフォーマンスへ繋がった。

No 7 の《Try Everything》はディズニーアニメ映画『ズートピア』の主題歌である。夢を叶えようとする人を応援するような曲で、前に向かって進んで行くアップテンポなリズムなので、物事に立ち向かうイメージが作りやすく、今回の劇では登場人物たちが風邪菌と戦う場面をダンスで表す曲として使用した。

No 8 の《うさぎとかめ》は、「もしもしかめよ」の替え歌で、歌のリズムにのって楽しく手を洗うことができるように工夫されたものである<sup>3)</sup>。保健教諭の指導もあったことがきっかけで、取り入れた。

No 11 の《カレーライス》は「カレーライス」を「シチュー」に置き換えて使用した。エコーソングで歌いやすく、手あそびもでき、覚えやすい楽曲である。

No 12 の《ロックリバーへ》は、アニメ『あらいぐまラスカル』の主題歌である。子どもが主人公の物語らしく、子どもの純粋さを想像できる爽やかさと、前進して行くような明るさを併せ持つ曲調で、劇の終結にふさわしい、高揚感溢れる楽曲である。

No 13 の《ラララだいすき》はストレートな歌詞と歌いやすいメロディーで、子どもたちも覚えやすく、メッセージを伝えやすい楽曲である。



### 3.2.2 音楽表現の方法について

劇中の音楽は、表現の工夫を凝らすことで、より効果的になる。劇中使用した曲の一部について、表現の工夫により得られる効果をまとめると、表3のようになる。

表3 劇中音楽の表現の工夫とその効果

No	曲名	表現の工夫	効果
1	きらきら星	スラーとスタッカート	スラーはなめらかさ・柔らかさを、スタッカートは弾み・軽やかさを表現
2	やぎさんゆうびん	音域の変化	高音域は可愛らしい明るさ、低音域は堂々とした力強さを表現
3	やぎさんゆうびん	リズム変奏	リズム変奏により動きや表情に変化をつける
4	ライオンの大行進	強弱の変化	強い音は堂々とした力強さ、弱い音は繊細さを表現
5	あめがぼつぼつ	速度の変化	速いテンポは急いでいる様子、遅いテンポは緩やかな様子を表現
9	野菜みつけ歌	言葉のリズム・抑揚をメロディー化	場面をより印象づける、オリジナルの歌が生まれる
10	小さなピアノ	調性の変化	長調＝明るい、短調＝暗い、調性の持つ性格で感情を表す

※No は表2と同じ

No 1の《きらきら星》は、夜と朝の場面を表すときに使用したが、「静かに長く続く夜」のときはスラーをかけてフレーズを長く取り（譜例 1-1）、「明るく爽やかな朝」を表したいときはスタッカートで弾みをつけて表現した（譜例 1-2）。

No 2の《やぎさんゆうびん》では、通常の音域から1オクターブ上げて高音域で弾くことにより、「次の動作に移る合図として」だけではなく、響く音域で明るさを表現した。

No 3の《やぎさんゆうびん》のリズム変奏は、元々等拍リズムで書かれているメロディーをスキップリズムに変奏して、ヤギ役の子どもが楽しくスキップする場面に使用した。

No 4の《ライオンの大行進》では、「熱が出て弱っているライオン」役の子どもが弱さを表現しているときは弱音（ピアノ）で、強さを表現しているときは強音（フォルテ）で、音量を調整して表現した。

No 5の《あめがぼつぼつ》は幕間等のBGMとしても使用したが、次の場面を早く見たいような場面展開のときは速めの速度で（譜例 2-1）、幕間が長く落ち着かせたいときには遅めの速度で（譜例 2-2）演奏し、雰囲気を出した。なお、ニワトリの登場のときには、「ニワトリがえさをついばみながら歩いている様子」が表現できるようにした。

No 9の《野菜みつけ歌》は、「ヤギが野菜を見つけに行く」場面で、子どもたちが口にした言葉が次第に台詞になり、それに鼻歌が乗り、ロズさんでいるうちに「歌」に発展したものである（譜例 3）。

No 10の《小さなピアノ》は、ヤギ役の子どもがひとりぼっちになる場面で、「ひとりじゃ楽しくないよ。」という台詞を寂しそうに言う表現をサポートするよう、短調（暗い）の曲を使用した。



譜例 1-1



譜例 1-2



譜例 2-1



譜例 2-2



譜例 3

子どもたちとの関わりあいを繰り返し重ねる中で、子どもたちの表現活動は徐々に豊かになっていく。子どもたちとの関わりあいの中で生まれた顕著な例は、台詞から歌詞になり、鼻歌から歌へと発展した《野菜みつけ歌》がわかりやすい例であろう。

「劇あそび」の音楽をピアノで表現することは、保育者に演奏技術と表現力を要求するものであるが、楽曲が元々持っている性質が、自然に子どもたちの表現を引き出すことに繋がる。演奏上の表現の工夫の難易度は、個人差はあるが、強弱、音域、速度、アーティキュレーション（スラーとスタッカート）、リズム、調性の変化、の順に取り組みやすいと考えられる。

### 3.3 「劇あそび」における音楽の役割と効果

子どもたちは、曲のテンポが変わればその速さに変え、リズムが変われば動きを合わせようとする。曲の雰囲気が変わればそれを感じ取り、イメージを膨らませ表現しようとする。このように、楽曲の性質や表現技法等は、子どもたちの表現力を高めてくれるものである。また、それは物事に対する理解をより深めていくことに繋がるであろう。白石（2006）は、音楽の機能を「①音楽は組織化された時間を作り出す ②音楽は人の心に働きかける ③音楽は身体に関わる ④音楽はコミュニケーションの方法にもなる」の4点に集約している。音楽は、言葉だけでは表現し尽せない雰囲気や感情などを、繊細に表すことができる。その力は、言葉が未発達な子どもたちにとって、大きな力となってくれるだろう。また、音楽を通じて他者と共感し合い、その安心感の中で、他者との関係性も築き易くなり、同時に自分を認める肯定感の芽生えも期待される。中川ら（2015）は、「音楽をみんなで楽しみながら一体感を味わう体験」が、「人とかかわることの楽しさや喜びを知る契機となり、人とかかわる力を身につける原動力となるであろう。」と述べている。

劇は、「言語」「身体」「音楽」といった多分野からなる総合的活動である。他分野から音楽表現を引き出すことにより、それぞれの分野が繋がりとまりができる。そういった音楽の持つ力は、子どもたちの感性に働きかけ、心を育んでくれる。また、劇中に使われる音楽は、劇の役柄を理解することにも一役買い、ストーリーの進行、展開等において、効果を発揮してくれる。「劇あそび」における音楽は、陰に陽に子どもたちを輝かせる役割を担ってくれるものである。

## 4. 保育者に求められるもの－「劇あそび」の音楽づくりにあたって

N 幼稚園の「劇あそび」では、普段はなかなか自分の気持ちを表現できない子が自分ではない登場人物になることで表現することができたり、恥ずかしさや緊張を感じながらも友だちと一緒にやり切ろうとしたりする姿がみられた。劇の発表にあたって保育者は、子どもたちの今までの生活、あそび、育ちが十分に発表できるものであること、また一人一人が無理なく輝くことができるものになるよう、心を砕いていた。ただ、保育者自身は、劇の音楽をピアノで表現することに苦労したようである。

実際に「劇あそび」で使用した楽曲一覧（表2）からわかるように、ひとつの劇の様々な場面や心情に応じて挿入される音楽は曲数も多く、ジャンルも多岐にわたる。保育者には、音楽の知識と情報が求められ、さらにそれをピアノで弾く技術、実演で表現する役割も期待される。何があっても「最後まで音楽を止めずに弾ききること」は基本である。「劇あそび」の音楽づくりにあたって、保育者には「観察力」「応用力」「表現力」の三つが必要であると考えられる。

観察力は、子どもたちの様子を見て、様々なことを汲み取る力である。子どもの様子を見ながら、臨機応変に、余裕をもって演奏できることが望ましい。

応用力は、曲などをアレンジしたり、既存の台本などを書き換えたりする力である。「劇あそび」は、子どもたちとのやりとりを通して発展させ、作り上げるものである。子どもたちと共に「世界にひとつだけの劇」を作り上げるためには、題材となる絵本や歌を様々なアレンジできる、柔軟な発想力を持つことが大切である。

表現力は、場にふさわしい雰囲気や表情豊かに演奏する力である。曲や場面にマッチするテンポやリズムで弾くためには、「静かに」「はずむように」「悲しく」など、イメージを豊かにし、それらを音で表現する技術が必要である。音を使った合図や指示ができることも、生活発表会などの行事では大切なテクニックである。

様々な場面に応じて選曲できる音楽の知識とレパートリー、表情豊かに演奏できる音楽的な技術とセンスは、一朝一夕に身に付くものではない。歌の伴奏を少し変えてみたり、替え歌を作ってみたり、保育者自身が日頃から「音楽であそんでみる」ことは非常に有益であろう。また、音楽鑑賞や観劇など、芸術に触れて感性を磨くことも大切である。保育者には、「音楽への関心と探求心を常に持ち続けること」が求められるといえよう。

## 5. おわりに

子どもたちが「劇あそび」を披露する「生活発表会」は、「子どもたちの日常の園生活を発表し、保護者の方々に子どもの成長を見ていただく機会をもつ行事」である<sup>4)</sup>。「劇あそび」は、日常の「表現あそび」の発展したものであり、はじめから劇として見せることを目的とするものではないが、子どもたちは次第に、保護者に見てもらおうことを楽しみにするようになる。発表会は、子どもたちが表現する喜びや自信を得るきっかけとなる、大切なイベントなのである。

保育者のピアノが始まると、そこは物語の世界になり、ピアノに合わせて役に扮した子どもたちが登場、最後の一音が消えるまで、精一杯、自分なりの表現をする子どもたちの姿は感動的である。保育者のピアノが雰囲気をつくり、子どもたちへの合図や歌の伴奏となるなど、物語の進行や演出において音楽の果たす役割は大きい。それだけに、音楽やピアノに苦手意識のある保育者にとって「生活発表会」の「劇あそび」は、大きなプレッシャーがのしかかるイベントでもある。

昨今、保育者の採用にあたり、ピアノの演奏技能のレベルや比重が引き下げられる傾向が見受けられるが、大学の保育者養成課程への入学者にピアノ未経験者が増えていること、ピアノが弾けないからという理由で就職先として幼稚園を敬遠する学生が少なくないこと等が背景にあると考えられる。日々の保育において、ピアノが非常に有効な手立てとなることは言うまでもないが、子どもたちに直接語りかけ歌いかける存在として、保育者には表情豊かな歌唱力こそ、より求められるといえるだろう。

とはいえ、生活発表会のようなイベントにおいては、オーケストラの役割を担うことのできる楽器として、ピアノはやはり欠かせない。CDなどの音源を使うことももちろん可能であるが、日々子どもと接している先生が子どもたちのためにピアノを弾くことの安心感は、何物にも代えがたい。保育者が子どもたちと共に、子どもたちと呼吸を合わせて演奏することは、たとえ簡易な伴奏であっても、一体感を生むことは間違いない。

現場の先生からは、「子どもたちが喜んでくれるから、苦手なピアノも頑張れます」という声を聴く。安易な音源利用に流れることなく、生演奏の良さを知り、子どもたちと共に音楽を楽しむこと。これからも、本学保育者養成課程で伝え続けたいことである。

## 注

- 1) 『保育用語辞典 [第8版]』 p 70.
- 2) 『保育用語辞典 [第8版]』 p 91-92.
- 3) 手洗い「うさぎとかめ」替え歌（鳥取県南部町）参照。  
[https://www.town.nanbu.tottori.jp/user/filer\\_public/6d/9e/6d9e04a3-671e-4090-9c4e-4c369857196a/usagitokame.pdf](https://www.town.nanbu.tottori.jp/user/filer_public/6d/9e/6d9e04a3-671e-4090-9c4e-4c369857196a/usagitokame.pdf) (2024/5/15 取得)
- 4) 『保育用語辞典 [第8版]』 p 98-99.

## 引用

- ・森上史朗・柏女霊峰 編：『保育用語辞典 [第8版]』，ミネルヴァ書房，2015.
- ・遠藤晶・江原千恵・松山由美子・内藤真希：幼児の「表現する過程」を大切にしたい劇つくりの実際，武庫川女子大学紀要，2009.
- ・柴田詠子：幼児教育における「劇つくり」に関する基礎的研究（1），札幌大学学術情報リポジトリ，2018.
- ・伊勢田亮：子どもの発達と劇遊び，日本福祉大学福祉社会開発研究所『日本福祉大学研究紀要—現代と文化』第104号，2001.
- ・白石昌子：乳幼児の発達と音楽の関係—音楽の機能が及ぼす影響についての検討を通して—，人間発達文化学類論集第3号，2006.
- ・中川華那・片山美香：音楽による幼児の表現活動の意義と保育者の援助に関する研究—人とかかわる力を育むために—，岡山大学教師教育開発センター紀要第5号，2015.

## 参考文献

- ・石井玲子 編著：『表現者を育てるための保育内容「音楽表現」—音遊びから音楽表現へ—』，教育情報出版，2020.
- ・文部科学省：幼稚園教育要領（平成29年3月），2017.
- ・利根川彰博：幼児期における劇活動の内実と，子どもにとっての劇活動の魅力，秋草学園短期大学紀要36号，2019.
- ・中野圭子：保育者養成校における総合的な表現活動に関する一考察—領域「表現」から考える創作音楽劇の意義—，園田学園女子大学論文集第57号，2023.
- ・開仁志：保育内容5領域と育みたい資質・能力の関係についての考察，金沢星稜大学人間科学研究，第11巻第2号，2018.
- ・石田愛子・稲葉修子・葉谷佳苗：子どもの「表現」活動を支える保育者の音楽力について—幼稚園教育実習後の学生アンケートと指導法の検討を通して—，芦屋大学論叢第78号，2023.

